

卷二

太田和泉守これを綴る

六条合戦の事

永禄十二己巳

正月四日 三好三人衆并に斎藤右兵衛大輔龍興、長井隼人等、南方の諸牢人を相催し、先懸の大将、薬師寺九郎左衛門、公方様六条に御座候を取詰め、門前を焼き払ひ、既に寺中へ乗り入るべきの行なり。爾処、六条に楯籠る御人数、細川典厩、織田左近、野村越中、赤座七郎右衛門、赤座助六、津田左馬丞、渡辺勝左衛門、坂井与右衛門、明替十兵衛、森弥五八、内藤備中、山県源内、宇野弥七。若狭衆、山県源内、宇野弥七兩人は隠れなき勇士なり。御敵薬師寺九郎左衛門、幢本へ切つてかゝり、切り崩し、散々に相戦ひ、余多に手を負はせ、鎧下にて兩人討死候なり。襲ひ懸れば追ひ立て、火花をちらし相戦ひ、矢庭に三十騎計り射倒す。手負・死人算を乱すに異ならず。乗り入るべき事、思ひ懸けも寄らざるところに、三好左京大夫、細川兵部大輔、池田筑後、各後卷にこれあるの由、承る。薬師寺九郎左衛門小口を甘ゲ候。是れは後卷かつら川表の事、細川兵部大輔、三好左京大夫、池田筑後、池田せいひん、伊丹、荒木、茨木へ懸げ向かひ、かつら川辺にて御敵に取合ひ、則ち一戦に及び、推しつおされつ、黒煙を立てて相戦ひ、

鎗下にて討取る頸の注文、高安権頭、吉成勘介、同弟岩成弥介、林源太郎、市田鹿目介、是れ等を始めとして、歴々の討取り、右の趣、信長へ御注進。

御後卷信長、御入洛の事

正月六日 濃州岐阜に至つて飛脚参着。其の節、以外の大雪なり。時日を移さず御入洛あるべきの旨、相触れ、一騎懸に大雪の中を凌ぎ打ち立ち、早御馬にめし候らひつるが、馬借の者も、御物を馬に負候とて、からかいを仕り候。御馬より下りさせられ、何れも荷物一々引見御覧じて、同じおもさなり、急ぎ候へと仰せ付けられ候。是れは奉行の者に依怙鼻肩もあるかと、おぼしめしての御事なり。以ての外の大雪にて、下々夫以下の者寒死も数人これある事なり。三日路の所二日に京都へ、信長馬上十騎ならでは御伴なく、六条へ懸け入り給ふ。堅固の様子御覧じ、御満足斜ならず。池田せいひん今度の手柄の様体聞こしめし及ばれ、御褒美是非に及ばず。天下の面目、此の節なり。さて、此の以後、御構へこれ無く候ては如何の由に候て、尾濃江勢三、五畿内、若狭、丹後、丹波、播磨十四ヶ国之衆在洛候て、二条の古き御構へ堀をひろげさせられ、

公方御構へ御普請の事

永禄十二年己巳二月廿七日、辰の一点、御鞞初めこれあり。方に石垣両面に高く築き上げ、御大工奉行村井民部・島田所之助に仰せ付けらる。洛中洛外の鍛冶・番匠・杣を召し寄せ、隣国隣郷より材木をよせ、夫々に奉行を付け置き、由断なく候の間、程なく出来し訖んぬ。御殿の御家風尋常に金銀をちりばめ、庭前に泉水・遣水、築山を構へ、其上、細川殿御屋敷に藤戸石とて往古よりの大石候。是れを御庭に立て置かるべきの由にて、信長御自身御越しなされ、彼の名石を以てつゝませ、色々花を以てかざり、大綱余多付けさせられ、箆、大鼓、つゞみを以て囃し立て、信長御下知なされ、即時に庭上へ御引付け候。并に東山慈照院殿の御庭に一年立て置かれ候九山八海と申し候て、都鄙に隠れなき名石御座候。是れ又、召し寄せられ、御庭に居えさせられ、其の外、洛中洛外の名石・名木を集め、眺望を尽くさる。同馬場には桜をうへ、桜の馬場と号し、残る所なく仰せ付けらる。其の上、緒侯の御衆、御構への前後左右に、思々の御普請、歴々甍を並べ御安座擒ひ、御祝言の御太刀、御馬御進上。御前へ信長召し出だされ、忝くも三献の上、公儀御酌にて御盃并に御剣色々御拝領。御面目の次第、申すも愚かに候。

御修理の事

今度隣国の面々等、長々在洛にて、粉骨を尽さる。信長其の面々へ御礼仰せら

れ、帰国の御暇下され候ひしなり。

抑も禁中御廢壞正躰なきの間、是れ又、御修理なさるべきの旨、御奉行、日乗上人、村井民部少輔、仰せ付けられ候らひき。

名物召し置かるゝの事

然るに、信長、金銀・米錢御不足なきの間、此の上は、唐物天下の名物召し置かるべきの由、御錠侯て、先、

上京大文字屋所持の 一、初花。祐乗坊の 一、ふじなすび。法王寺の 一、竹さしやく。池上如慶が 一、かぶらなし。佐野 一、雁の絵。江村 一、もゝそこ。以上。友閑・丹羽五郎左衛門御使申し、金銀八木を遣はし、召し置かれ、天下の定目仰せ付けらる。

阿坂の城退散の事

五月十一日 濃州岐阜に至りて御帰城なり。

八月廿日 勢州表へ御馬を出ださる。其の日、桑名まで御出で、翌日、御鷹つかはされ、御逗留。廿二日、白子観音寺に御陣を懸けられ、廿三日、小作に御着陣。雨降り御滞留。廿六日、あさかの城、木下藤吉郎先懸いたし攻められ候て、

堀ぎはへ詰めよせ、薄手をかふむり、罷り退かる。あら貼と攻められ、拘へ難く
存知、降参候て退散なり。滝川左近、人数入れ置き、是れよりわき貼の小城へは
御手遣もなく、直ちに奥へ御通り候て、国司父子楯籠られ候大河内の城とり詰め、
信長懸け廻し御覽じ、東の山に信長御陣を居えさせられ、其の夜、先、町を破ら
せ、焼き払ひ、廿八日に四方を懸けまはし御覽じ、

南の山に、織田上野守、滝川左近、津田掃部、稲葉伊予、池田勝三郎、和田新
介、中島豊後、進藤山城、後藤喜三郎、蒲生右兵衛大輔、永原筑前、永田刑部少
輔、青地駿河、山岡美作、山岡玉林、丹羽五郎左衛門置かれ、西に木下藤吉郎、
氏家卜全、伊賀伊賀守、飯沼勘平、佐久間右衛門、市橋九郎右衛門、塚本小大膳。
北には斎藤新五、坂井右近、蜂屋伯耆、築田弥次右衛門、中条将監、磯野丹波、
中条又兵衛。東に柴田修理、森三左衛門、山里三左衛門、長谷川与次、佐々内蔵
介、佐々隼人、梶原平次郎、不破河内、丸毛兵庫頭、丹羽源六、不破彦三、丸毛
三郎兵衛。

ケ様に陣取り仰せ付けらる。其上、四方しゝ垣二重三重結はせられ、緒口の通路
をとめ、尺限の廻番衆、菅屋九右衛門、塙九郎左衛門、前田又左衛門、福富平左
衛門、中川八郎右衛門、木下雅楽介、松岡九郎二郎、生駒平左衛門、河尻与兵衛、
湯浅甚介、村井新四郎、中川金右衛門、佐久間弥太郎、毛利新介、毛利河内、生
駒勝介、神戸賀介、荒川新八、猪子賀介、野々村主水、山田弥太郎、滝川彦右衛
門、山田左衛門尉、佐脇藤八。信長御座所御番の事、御馬廻御小姓衆、御弓の衆・

鉄炮衆に仰せ付けられ候なり。

九月八日 稲葉伊予、池田勝三郎、丹羽五郎左衛門、両三人西搦手の口より夜攻めに仕るべきの旨、仰せ出だされ、御請け申す。其の日、夜に入り、三手に分けて攻められ候。人数を出だされ候へば、雨降り候て、御身方の鉄炮御用に罷り立たず候なり。

池田勝三郎攻め口にて、御馬廻の、朝日孫八郎・波多野弥三、討死仕り候なり。丹羽五郎左衛門攻め口にて討死の衆、近松豊前、神戸伯耆、神戸市介、山田大兵衛、寺沢弥九郎、溝口富介、斎藤五八、古川久介、河野三吉、金松久左衛門、鈴村主馬、初めとして、究竟の侍廿余人、夜合戦に討死。

九月九日 滝川左近に仰せ付けられ、多芸谷国司の御殿を初めとして、悉く焼き払ひ、作毛を薙ぎ捨て、忘国にさせられ、城中は干殺しになさるべき御存分にて、御在陣候のところ、俄かに走入り候の者、既に端々餓死に及ぶに付いて、種々御侘言して、信長公の御二男、お茶釜へ家督を譲り申さるゝ御堅約にて、

十月四日 大河内の城、滝川左近・津田掃部兩人に相渡し、国司父子は、笠木坂ないと申す所へ退城候ひしなり。

関役所御免除の事

然る間、田丸の城を初めとして、国中城々破却の御奉行、万方へ仰せ付けらる。

其上、当国の諸関、取分け往還の旅人の悩みたる間、末代に於いて御免除の上、向後関銭召し置かるべからざるの旨、堅く仰せ付けらる。

伊勢御参宮の事

十月五日 信長公山田に至つて御参宮。堤源介の所に御寄宿。六日に内宮・外宮・浅間山に御参詣なさる。翌日御下向、小作御泊。八日上野に御陣を懸けられ、是れより緒勢打ち納めらる。

御茶羹公、大河内城主として、津田掃部を相添へ置かれ申され、あのゝ津・しづみ・小作三ヶ所に滝川左近をかせられ、うへ野には織田上野守を置き申され、御馬廻計り京都へ御伴。其の外、緒卒国々へ帰陣侯へと、御いとま下さる。千草峠を打ち越え、直ちに御上洛。九日に千草まで御出で、其の日雪降り、山中大雪に候事。十日江州市原に御泊。十一日御上京、勢州表一国平均に仰せ付けられたる様躰、公方様へ仰上げられ、四、五日御在洛にて、天下の儀仰せ聞かる。

十月十七日 濃州岐阜に至りて御帰陣、珍重々々。